

市長賞

堺市立 深井中学校 三年

中 彩 乃

テーブルからの学び

「これいいでしょ。」

「飾り彫りもあって、高そう。」

「刑務所の展示会で見つけたんよ。」

祖母と母の会話が私の耳に入ってきた。小さい頃から、使っているテーブルセットの話をしてきた。私は、ショックを受けていた。刑務所という言葉の衝撃と疑問が頭の中を駆けめぐったのだ。

小さい頃から、祖父母の家に行くのが大好きだった。私の誕生日やお正月には、そのテーブルを囲んだ。洋風で光沢があり、品のあるテーブルだ。美しい思い出が、その会話で打ち消されてしまうかのようにだった。どうして刑務所で作った家具を買ったのだろう。私のきよとんとした顔に気付いて、祖母が説明してくれた。偶然、広告を見て展示場に足を運んだそう。社会復帰した時に、刑務所で習得した技術を生かすことができることを。そして、製品の売り上げの一部が犯罪被害者支援団体の役に立つことを教えてもらった。私は、刑務所は悪であるという偏見を持っていたのだ。法律を犯してしまつたら、刑務所に行くということしか知ら

なかった。その後のことを考えてみたこともなかった。

誰だつて生まれた時から悪い人間であつたはずがない。何かのきっかけで、犯罪というハードルを飛び越えてしまったのだと思う。罪を償つたのに、無知だった私のような偏見の目で、周りから見られたら、どんなに辛いだろう。その目が再犯をしてしまう状況に追いやつてしまうかもしれない。教室で一人異質物のよくな目で見られ、休み時間を過ごす自分を想像してみた。きっと逃げ出したくなる。友達とつながっているから、しんどい事も乗り切れる。社会復帰した後、あたたかい目で社会とつながることができたら、つらい事も乗り越え、やり直すことができるはずだ。

私も含め、なぜ偏見は生まれてしまうのか。それは、相手のことを知らないのに、自分のものさしだけで見てしまうからだ。自分のものさしが誤っていることなど考えもしないで。私は、祖母の家具がきっかけで、罪を犯してしまった人の社会復帰について考える機会を得ることができた。学校では、麻薬や万引き喫煙や飲酒について学んだことがある。犯罪や非行からの再出発につい

でも学ぶ機会を増やすべきだと思う。私が偏見を持ったまま大人になれば、子供にそれが引き継がれる。偏見の連鎖が生まれる。偏見が偏見を生む。あつてはならないことだ。人間は学ぶことができる。学ぶことよって過去よりも未来を明るくものにできるのだ。そして、教育だけでなく地域のつながりも大切だ。祖母は偶然目にした広告で、刑務所の取り組みに参加できた。

他にどんな取り組みがあるのかインターネットで調べてみた。キャピックという商標があることを初めて知った。家具の他にも、神輿や犬小屋、革ぐつなど、幅広い製品があることにとても驚いた。インターネットでも販売されていた。社会貢献に気軽に参加できてすばらしい取り組みだと思う。

中途半端な取り組みで、細かな飾り彫りがほどこされたテーブルを作るわけがない。私は、作ってくれた方の一生懸命な取り組みさえも否定してしまったのだ。自分自身がはずかしい。私と祖母との楽しい思い出が詰まっている素敵なテーブルを作ってくれた人は、どんな人だろう。感謝の気持ちを伝えたい。そして、その方が社会復帰して、もっともっと素敵な家具を作ってくれていたらと思う。私が大人になって家具を買うことになったら、ぜひ刑務所の展示場に足を運びたい。

